



長野県大町市

木崎夏期大学遺跡

KIZAKI-KAKIDAIGAKU SITE

2022

南山大学 上野篤史研究室

UEMINE Atsushi Lab
for Archaeology & Archaeological Science,
Nanzan University, Nagoya, Japan

長野県大町市

木崎夏期大学遺跡

KIZAKI-KAKIDAIGAKU SITE

Published by

UEMINE Atsushi Lab for Archaeology & Archaeological Science

Nanzan University, 18 Yamazato-cho, Showa-ku, Nagoya 466-8673, Japan

Copyright ©UEMINE Atsushi 2022

例 言

1. 本書は、木崎夏期大学遺跡（長野県大町市大字平字稻尾 10901）の学術発掘調査の成果報告書である。
2. 発掘調査は南山大学上峯篤史研究室が調査主体となり、2019年12月14日～12月22日の期間に実施した。調査面積は6m²である。
3. 発掘調査は上峯篤史（南山大学人文学部人類文化学科准教授）の指導のもと、鶴賀芽衣（南山大学大学院生・当時）が調査主任を務め、以下の参加者と調査を遂行した。加藤大智、堀内祐花、飯塙寿音、青野舜、吉川圭浩、岩月佑真、佐々木彩乃。（南山大学学生・当時）、鈴木しゅん菜、村井咲月（南山大学学生）。
4. 発掘調査の実施において、長野県教育委員会および大町市文化財センターから御指導を賜った。杉原保幸氏からは、木崎夏期大学遺跡や出土遺物について、有益な御教示ならびに御配慮を頂いた。
5. 本書の執筆作業の一部は、南山大学大学院2021年度開講科目「地域考古学研究（日本列島先史時代）」（担当：上峯）として実施した。
6. 遺物のうち土器の整理作業は主に堀内が担当した。石器の整理作業は、加藤が担当した。調査記録の解析や図化、写真撮影作業は上峯、加藤、堀内、青野、吉川が担当した。
7. 本書は、上峯の指導のもと、加藤が編集した。原稿の執筆分担は各項目の末尾に示した。
8. 発掘調査の記録、写真等は南山大学上峯篤史研究室が保管している。出土遺物は大町市教育委員会委員会に移管予定である。

目 次

1. 発掘調査の目的 1	Fig.1 木崎小丸山遺跡の層序と石器 1
2. 研究の対象 2	Fig.2 木崎湖周辺の地質と遺跡分布 3
(1) 周辺の地質・地形		Fig.3 発掘区の配置と調査の様子 5
(2) 周辺の遺跡		Fig.4 発掘区の層序 7
(3) 小丸山丘陵における既往の調査		Fig.5 出土遺物 8
3. 発掘調査の方法 4	Table.1 繩文土器の諸属性 9
4. 発掘調査の成果 6	Table.2 石製遺物の諸属性 9
(1) 層序			
(2) 出土遺物			
5. 結論 9		

引用文献
報告書抄録

1. 発掘調査の目的

木崎夏期大学遺跡は長野県大町市大字平字稻尾に所在する遺跡で、かねてから縄文時代の遺物散布地として知られていた。大町市教育委員会(1988)が指定する遺跡範囲は、大正年間に起源をもつ学術セミナーの学び舎である信濃講堂をのせる丘陵から、食生態学者・探検家として著名な西丸震哉氏をたたえる記念館がたつ小丸山丘陵までを包摂する。このうち、遺跡の北端部にあたる小丸山丘陵において、2009年頃から杉原保幸(西丸震哉記念館)が学術研究を開始し、その成果が日本旧石器学会などで発信されるやいなや、本遺跡は旧石器時代研究の俎上にのることになった。杉原が提示した、小丸山丘陵に堆積するローム質土層と同層中から回収されたという石製資料は、日本列島の後期旧石器時代開始期と目される約4万年前を大きくさかのぼる可能性を秘めていたためである。杉原の積極的な研究活動は、2016年に実施された松藤和人や筆者の学術発掘調査を導き、約8.6万年前の旧地表面上から、複数の剥離面をもつ石製資料が出土した(松藤ほか2017)、(Fig.1)。堆積物の層相や石製資料の特徴は、これらが人類の関与なくしては存在し得ないことを示唆しており、日本列島における前・中期旧石器時代遺跡の候補地として、多くの研究者がその研究動向を見守っている(堤2020、久保2021など)。

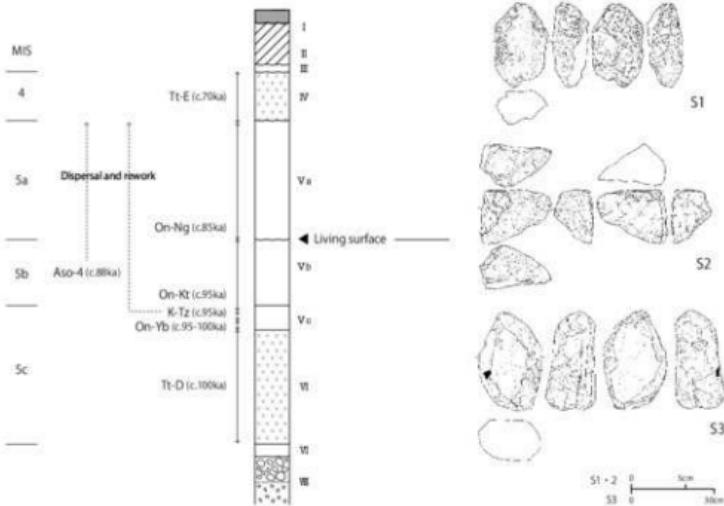


Fig. 1 木崎小丸山遺跡の層序と石器(上岸2017)

2016年の学術発掘調査は日本考古学にさまざまな課題を投げかけたが、もっとも基礎的な課題として残されたのが、遺跡の層序、とりわけ小丸山丘陵における黒ボク土層の存否問題である。大町市域では旧大町スキー場の層序が基本層序を提供しているが(平林1984)、発掘調査で把握された小丸山丘陵の層序には、黒ボク土層は欠落する(松藤ほか2017)。一方、2016年発掘区に東接する小丸山丘陵東部では、2009年以降の杉原や大町市教育委員会の発掘調査で、黒ボク土層から縄文時代遺物が出土しているとされる。すなわち旧石器時代研究の舞台となっている範囲と、從来から縄文時代遺跡として知られていた範囲では堆積物の層相が著しく異なっている。このことは、例えば杉原が小丸山丘陵の各地点から収集した発掘資料(松藤ほか2021)の評価を左右しよう。当該課題は発掘調査によって層序を確認することでしか解消されないと考え、小丸山丘陵東部において小規模な発掘調査を実施した。調査の目的は、初成的な黒ボク土層の有無と検出深度の確定、およびそれにともなう遺物・遺構の把握にある。

(上峯)

2. 研究の対象

(1) 周辺の地質・地形 (Fig.2a)

木崎夏期大学遺跡が所在する大町市には、西部に標高3000m級の北アルプス、東部に1000m級の山々が連なり、市の中央東寄りを糸魚川-静岡構造線(ISTL)が縦走している。ISTLの両側で地質構造が著しく異なり、西側にはジュラ紀-古第三紀の古期の岩石および一部鮮新世の火山岩が、東側には新第三紀系や新第四紀からなる岩石が分布する(加藤ほか1989)。

ISTLの西側の仁科山地は、地質的には飛騨外縁帯に属し、北部には塙基性火山岩・チャート・泥質岩および石灰岩から構成される神城層と、頁岩を主に、砂岩・礫岩をはさむ海成の木崎層(ジュラ系)が分布する(加藤ほか1989)。これらの基盤を被覆して、白亜紀後期の火碎流堆積物の木崎流紋岩、それに貫入する関連岩体の青木花崗岩、さらに貫入して広域に熱変成を与えて有明花崗岩が分布する(植木ほか2012)。

ISTLの東側の小谷-中山断層に至るまでの東西数km、南北20km余りの細長い地域は、いわゆる大峰帶の一部をなし、主に火碎流堆積物から構成される新第三紀鮮新世の美麻累層や大峰累層が分布する。第四紀更新世前期には河川によって新第三紀の地層から洗い出された新第三紀などに由来する礫をふくむ新行礫層が堆積する(加藤ほか1989)。これらの層を覆う大峰岩屑堆積物は、美麻・大峰累層起源の溶結凝灰岩の角礫のほか、基盤の先新第三紀の砂岩、チャートや黒色頁岩などの亜角礫をふくむ。

木崎夏期大学遺跡は両側を山地に挟まれた低地部に、ISTLに沿うかたちで発達した仁科三湖の最南端の木崎湖東岸の小丘付近に立地する。この一帯を大峰岩屑堆積物が覆い、「木崎小丸山遺跡」の発掘区でもV層として、これが検出されている(松藤ほか2017)。この堆積物を基盤として、その上に立山や御岳に由来するテフラやローム質土が堆積し、さらに更新世から完新世における湖成段丘堆積物、扇状地堆積物、崩積堆積物、湿地堆積物および冲積層などが累重している。低地部の大部分で、西側山地から供給される土壤によって形成された扇状地が見られる一方で、木崎夏期大学遺跡が所在する仁科三湖東岸では、姫川水系や高瀬川水系の支流が形成した小規模な扇状地性段丘が認められる(糸静線断層帯重点的調査観測 变動地形グループ2007)。

(吉川)

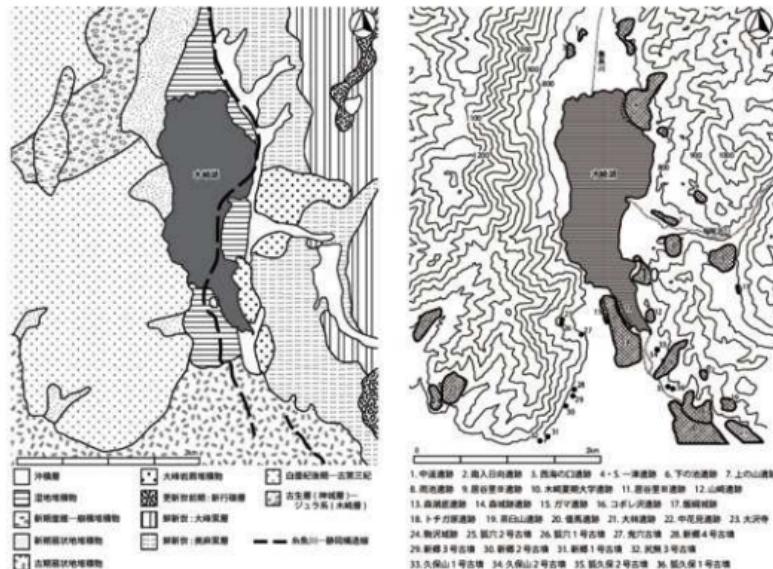


Fig. 2 木崎湖周辺の地質と遺跡分布 (a 地質 (加藤ほか 1989, 澤ほか 2006, 松多ほか 2006, をもとに作成) b 遺跡分布 (地理院地図および大町市文化財マップをもとに作成))

(2) 周辺の遺跡 (Fig. 2b)

大町市内における人類の活動痕跡は更新世に亘り、関連遺跡は平地区に集中する。木崎夏期大学遺跡に包摂される「木崎小丸山遺跡」は8.6万年の年代があたえられ、列島最古級の遺跡として位置付けられている(松藤ほか 2017)。また木崎湖湖畔では、南入日向遺跡で槍先形尖頭器が出土しているほか、青木湖の北岸に位置するクマンバ遺跡からもナイフ形石器と槍先形尖頭器が数点出土している。

完新世に入ってからも平地区には遺跡が多く、木崎湖近辺では炉跡が検出されたコボレ沢遺跡(16)やガマ遺跡(15)、トチガ原遺跡(18)などで、縄文時代早期の遺物が確認されている。一方で、大町市南部の常盤地区では、大規模な集落が形成された山の神遺跡(川崎編 2003)が知られる。前期では遺跡数が増加し、環状列石が検出された上原遺跡が古くから知られている(上原遺跡調査会 1957)。木崎湖周辺では上原式土器の単純遺跡である下の池遺跡(6)や、ガマ遺跡(15)、森城跡遺跡(14)、南入日向遺跡(2)、一津遺跡(4・5)などで、当該期の遺物が見られる。中期ではさらに遺跡数が増加し、木崎夏期大学遺跡(10)だけでなく、上の山遺跡(7)、山崎遺跡(12)、コボレ沢遺跡(16)、森城跡遺跡(14)、森湖底遺跡(13)、中花見遺跡(22)などが知られる。平地区に遺跡が集中する傾向は変わらないが、前期の遺跡の少ない常盤地区でも、多くの遺跡が形成される。後期になると中部高地では遺跡数が減少し、規模も縮小していく傾向があり、大

町市内でも遺跡数が減少する。ただし常盤地区の北山平遺跡のように大規模な遺跡も現れ、木崎湖周辺でも森湖底遺跡（13）や森城跡遺跡（14）、一津遺跡（4・5）などで遺物が確認されている。晩期にはさらに遺跡数が減少する。木崎湖周辺では住居址が検出されたトチガ原遺跡（18）だけでなく、中道遺跡（1）、ヒシイ製品の製作址である一津遺跡（4・5）など、低地にも集落が拡大する。

弥生時代には来見原遺跡や古城遺跡など、段丘上に遺跡が形成され、遺跡分布も大町市南部の社地区に偏る傾向があるが、平地区でも借馬遺跡（20）のように、稲作に適した低湿肥沃な農具川の沖積地には遺跡が残される。古墳時代に入ると大町市内の各地に古墳が造られるようになる。木崎湖周辺では鬼穴古墳（27）や孤穴1号・2号古墳（25・26）、新郷1号墳（31）などの古墳が確認されており、小熊山麗古墳群と称される。また農具川の東の丘陵部では孤久保山1号墳・2号墳（35・36）が知られる。
(加藤)

(3) 小丸山丘陵における既往の調査

2009年5月、西丸震哉記念館に「墓家」と称する竪穴住居状のアート作品が移築されるにともなって、西丸震哉記念館東隣地が掘削され、黒色土中から多数の縄文土器片が出土した。2009年11月には同地で烟の天地返しがされ、石皿状の木崎流紋岩と土器片が発見されている。これを受け、杉原が大町市文化財センターに調査を依頼し、同月、発掘調査が実施された。翌年2010年6月と12月にも、同地で杉原による発掘調査が実施されている。これらの発掘調査によって遺跡全体の1万m²のうち24m²が発掘され、配石を検出したほか、竹管文土器や五領ヶ台式併行期土器、梨久保式、新保・新崎式土器や石鎚、削器、打製石斧、石錘など、縄文時代中期初頭の資料が得られている（島田ほか2011）。

木崎夏期大学遺跡は縄文時代の遺跡として認識されてきたが、後期旧石器時代をさかのぼる遺跡として注目されるようになるのは2014年以降のことである。2014年12月に杉原が同志社大学に収集資料を持込み、これが契機となって、2015年7月・9月、2016年5月に学術調査が実施された（松藤ほか2017）。これらの調査で、御岳系テフラを母材とするローム質土中で旧地表面が見いだされ、その上面から流紋岩溶結凝灰岩製の両面加工石器、使用痕のある剝片、台石、碎片類が出土した。
(加藤)

3. 発掘調査の方法

杉原や大町市教育委員会による発掘調査成果を念頭に、縄文時代の遺物包含層が存在する西丸震哉記念館駐車場用地に2×3mのトレンチを設定した（Fig.3）。グリッドは1×1mで設定し、東方向から西方向へアラビア数字を、北方向から南方向へアルファベットをあてて区割りを表現・記録した。後述するように、A3層以下の掘削が及んだのは発掘区西端に設定した0.5×3m部分に限られる。発掘区の掘削や埋め戻しはすべて人力で行った。スウェーデン銅製の両刃鎌を用いて、土器や石器など遺物と層の変化に注意しながらスライスするように慎重に発掘を進めた。遺物が検出された箇所では竹べらを併用し、資料を傷つけないよう留意した。遺物の取りあげはグリッドごとで行い、A4層以降は排土を筋に掛け、微細資料の回収に努めた。発掘調査の経過は以下の通りである。

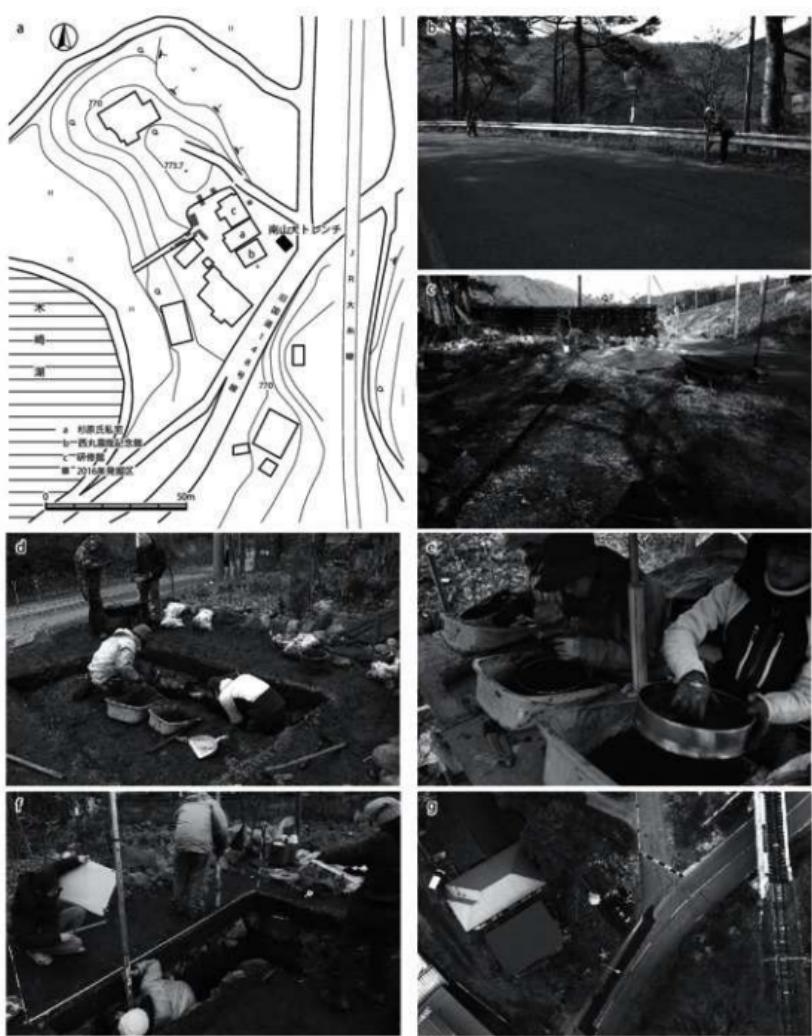


Fig. 3 発掘区の配置と調査の様子 (a 発掘区の配置 b 直接水準測量 c 調査区設定前 d 挖削作業 e ふるい掛け作業 f 土層断面図の作成 g 発掘区の空撮写真)

- 12/14 現地入り。発掘区を設定し、掘削開始。一部で A2 層を検出。
- 12/15 一等水準点（No. 2894）から直接水準測量。測量基準杭を設置。A1 層から繩文土器片が出土。発掘区全体で A2 層を検出。
- 12/16 排土のふるい掛けを開始。発掘区内のほぼ全域で A3 層を検出。写真撮影。a-2 区に 0.5×1 m の深掘区を設け、下層を確認。A4 層と A5 層を認識。A5 層から黒曜岩製遺物出土。
- 12/17 降雨のため、午前中は排土のふるい掛けに終始。午後から a-2 区の深掘を再開。B 層を検出。c-2 区に 0.5×1 m の深掘区を設ける。谷和隆氏（長野県教育委員会）、島田哲男氏（大町市文化財センター）来跡。
- 12/18 c-2 区でも B 層を検出。b-2 区を掘削。
- 12/19 深掘区で C 層を検出。a-2 区では、C 層を約 20cm 掘削したところで湧水に見舞われ、急速埋め戻す。
- 12/20 発掘区西壁にて堆積物の観察および写真撮影。遺跡周辺の地形調査。
- 12/21 土層断面図の作成。調査終了状況の撮影。C 層を一部サンプリング。発掘区の埋め戻しを開始。
- 12/22 発掘区の埋め戻しを完了。撤収。

（加藤・飯塚）

4. 発掘調査の成果

（1）層序（Fig.4）

発掘区で最下層とした C 層は明黄褐色のローム質土層であり、火山礫を面積割合で約 7% ふくむ。その上に堆積する B 層は締まりの良い極細粒砂で構成される黒ボク土層である。

B 層より上位に堆積する層を A 層として一括し、さらにそれを五つの亜層に細分した。A5 層は黒褐色の極細粒砂層で、色の異なる黒褐色の極細粒砂が面積割合で 10%，明黄褐色の極細粒砂ブロックが 2% ふくまれる。A5 層からガラス片やプラスチック製の現代遺物が出土したことから、A5 層以上の層は現代の搅乱土層であると考えられる。A4 層は黒色の極細粒砂層で、明黄褐色の極細粒砂ブロックを 5%，黄褐色の中粒砂ブロックを 3% ふくむ。それに続く A3 層は黄褐色と、にぶい黄色の中粒砂混じりの砂礫層で、中～大形の円礫をふくむ。層の面積割合の 40% を占める礫にインプレケーション（覆瓦状構造）は見られず、淘汰も悪い。A2 層は、黒褐色と黒色の細粒砂層で、黄色の極細粒砂ブロックを 7%，灰白色の極細粒砂ブロックを 3%，そして小～中形の礫を 1% ふくむ。A1 層は明黄褐色の細粒砂層で、黄色の細粒砂ブロックを 10%，灰白色的極細粒砂ブロックを 20% 程度ふくむ。この層が表土である。

（青野）

（2）出土遺物（Fig.5）

本遺跡から出土した繩文土器のうち、図化に耐えるものは 10 点である。いずれも中期前葉から中葉（猪沢式～井戸尻式併行）のもので、新崎式などの北陸系土器の特徴を有する。C1～C3 は口縁部片で、C1・C2 には爪形の刻みがある隆帯が施され、C3 には半截竹管による平行沈線が縦位や斜位に施されている。C4～C9 は胴部片である。C4 には爪形の刻みが施された隆帯の下に横位の隆線が 2 本引かれ、その下部に縦位の隆線をめぐらせる。C5 には横位の平行沈線と、その下に浅く格子状の沈線が引かれる。C6 には爪形の刻みのある隆帯の下に、横位の隆線が施される。同

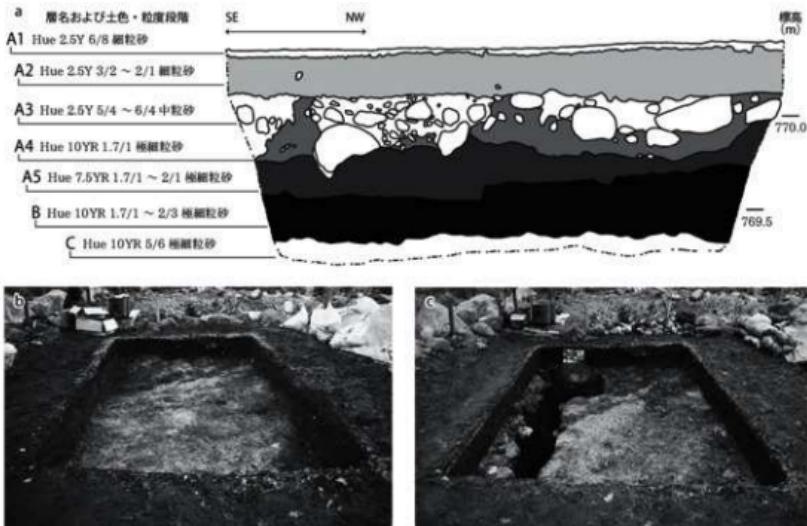


Fig. 4 発掘区の層序 (a 土層断面図 b A3 層上面検出状況 c 完掘状況)

じく刻みを有する土器片の中で、最も爪形の刻みが浅く、密に施される。C7には右燃りの単節縄文の押捺が3本確認できる。C8・C9は無文である。C10は平底の底部で、損傷が激しいため文様などは確認できない。

石器は黒曜岩を素材とする。これらの黒曜岩はどれも透明度が高く、「西露ヶ峰系」(杉原編 2009) 黒曜岩の特徴とよく類似する。S1は石器の二次加工の際に作出された剥片であろう。剥片の背面の上部を覆う並列した剥離痕は押圧剥離によって形成されたと推測される。これらの加工によって背面中央部にステップが生じ、その除去を目的とする直接打法によって一枚の剥片として取り除かれたと考えられる。S2は連続して作出された剥片のうち一枚であろう。背面のネガティップバルブと腹面のバルブの発達の程度は同様であり、打撃の強さを同じくした剥片剥離の様子がうかがえる。S3は石核である。正面の発達したネガティップバルブを持つ剥離痕は、夾雑物の影響で打撃時に力の方向が変えられことにより形成されたものと推測される。また正面を構成する2枚の剥離痕と、裏面側の剥離面でそれぞれ発達度の異なるキズが確認される。このキズは、S3が少なくとも二つの時期を跨ぐ打ち割りと異なる地点を経由して持ち運ばれてきたものであることを示唆している。

(堀内・加藤)

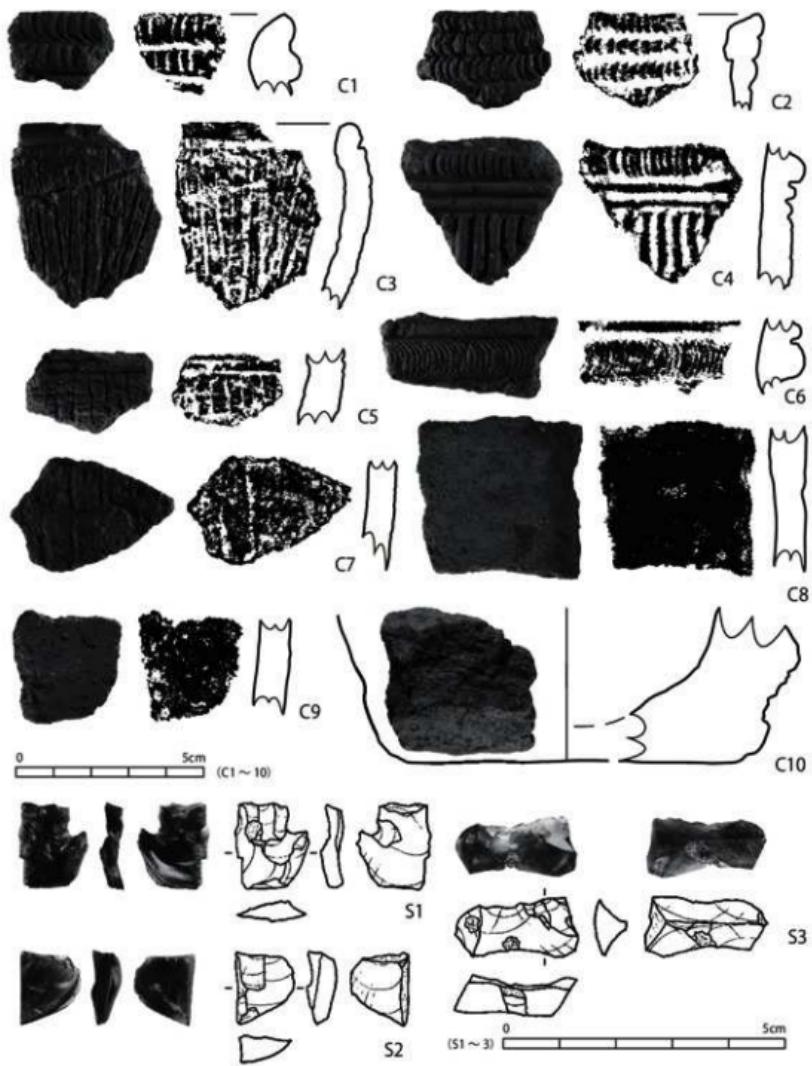


Fig. 5 出土遺物

5. 結論

このたびの発掘調査では当初想定されたよりも約 0.5 ~ 1m 下位で、黒ボク土層のプライマリーな堆積（B 層）を確認した。2016 年学術発掘調査（松藤ほか 2017）の成果に照らせば、今回の発掘区付近が谷にあたるのは明らかで、小丸山丘陵の裾部を際立たせる侵食谷が刻まれていたと考えられる。V 層の何れかに対比される黄褐色ローム質土層（C 層）を、黒ボク土層が直接覆っており、この間に大きな時間的間隙を指摘できる。黒ボク土層の上位に堆積する黒色の擾乱土層（A 層）からは、黒曜岩製遺物や縄文時代中期前葉から中葉の土器片が得られた（Table1・2）。これらの時期、材質、大きさは隣接地で出土していたものと共通している。以上の成果は、かつての調査で検出された「配石」や「生活面」（島田ほか 2011）に見直しを迫るものである。今回の発掘区をふくむ小丸山丘陵東麓部の古地形復原には、これまでの発掘調査などの所見を加える必要がある。この点については、別稿を用意して論じたい。

擾乱土層から出土した縄文時代遺物の来歴は知れないが、黒曜岩製遺物の材質や土器の型式学的特徴からは、はるか遠方からの客土を想定する必然性はない。周辺の高所からの流れ込みが考えられ、小丸山丘陵頂部で大町市文化財センターが実施した発掘調査成果（未公表）と関連づけて評価できよう。

（上峯・加藤）

Table1 縄文土器の諸属性

番号	層位	地区	部位	胎土		石英	長石	含有砂粒 空母	最大径mm
				内面	外側				
C1	A5	a-2	口縁部	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	少	微	3.0	
C2	A5	a-2/b-2	口縁部	7.5YR5/3 に赤褐色	7.5YR6/6 橙	少	やや多	微	2.0
C3	A5	a-2	口縁部	10R3/1 暗赤褐	10R4/6 赤	多	少	多	1.5
C4	A4	c-2	胴部	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	少	微	3.5	
C5	A5	b-2	胴部	5YR2/1 黒褐	2.5YR6/8 橙	多	微	2.0	
C6	A5	b-2	胴部	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	少	少	3.5	
C7	A1	—	胴部	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 に赤褐色	少	微	1.0	
C8	A5	c-2	胴部	5YR4/2 灰褐	2.5YR4/8 赤褐	微	少	微	2.0
C9	A4	a-2	胴部	5YR4/2 灰褐	2.5YR4/8 赤褐	少	多	微	2.0
C10	A5	a-2	底部	5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	少	やや多	微	1.0

Table2 石製遺物の諸属性

番号	層位	地区	器種	材質	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g
S1	A5	a-2	剥片	黒曜岩	1.6	1.4	0.4	0.48
S2	A5	a-2	剥片	黒曜岩	1.4	1.1	0.5	0.51
S3	A5	a-2	石核	黒曜岩	2.7	1.1	0.6	1.05

引用文献

- 植木忠正・原山 智 2012 「北アルプス、仁科山地における白亜紀後期の高温で水に乏しい珪長質火成活動」『地質学雑誌』118 (4), pp.207-219.
- 糸魚川構造断層帯重点的調査概測 変動地形グループ 2007 『糸魚川-静岡構造断層帯変動地形資料集 No.1 北部（白馬-松本間）』。
- 上峯萬史 2017 「長野県木崎小丸山遺跡の調査」『新学術領域研究「パレオアジア文化史学」A01 東アジア班セミナー 東アジアにおけるホモ・サピエンス出現前後の考古学 予稿集』。松藤和人, pp.27-29。
- 大町市教育委員会 1988 『大町の遺跡 長野県大町市遺跡詳細分布調査報告書』。
- 加藤慎一・佐藤岱生・三村弘二・滝沢文教 1989 「大町地域の地質」地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）, 地質調査所。
- 川崎 保（編）2003 『山の神遺跡』国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター。
- 久保弘幸 2021 「兵庫県における旧石器時代研究の課題」『兵庫県立考古博物館研究紀要』14, 兵庫県考古博物館, pp.15-22。
- 澤 祥・田力正好・谷口 薫・廣内大助・松多信尚・安藤俊人・佐藤善輝・石黒聰士・内田主税・坂上寛之・隈元 崇・渡辺満久・鈴木康弘 2006 「糸魚川-静岡構造断層帯北部、大町～松本北部間の変動地形認定と鉛直平均変位速度解明」日本活断層学会『活断層研究』26, pp.121-136。
- 島田哲男・杉原保幸 2011 「木崎夏期大学遺跡」『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定－基礎データ集（2）－』明治大学古文化研究所, pp.176-178。
- 杉原重夫（編）2009 『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定－基礎データ集（1）－』明治大学古文化研究所。
- 堤 隆 2020 「巻頭言」『旧石器時代研究への視座』2, 旧石器基礎研究・次世代育成グループ, pp.2-3。
- 平林照雄 1984 「第1編 地形地質」『大町市史 第1巻自然環境編』。大町市, pp.3-332。
- 松多信尚・澤 祥・安藤俊人・廣内大助・田力正好・谷口 薫・佐藤善輝・石黒聰士・内田主税・佐野滋樹・野澤竜二郎・坂上寛之・隈元崇・渡辺満久・鈴木康弘 2006 「写真測量技術を導入した糸魚川-静岡構造断層帯北部（梅池・木崎湖）の詳細変位地形・鉛直平均変位速度解析」『活断層研究』26, 日本活断層学会, pp.105-120。
- 松藤和人・上峯萬史・萩田みゆき（編）2017 「長野県木崎旧石器小丸山遺跡の研究」『旧石器考古学』旧石器文化談話会, 82, pp.1-26。
- 松藤和人・上峯萬史・杉原保幸 2021 「長野県大町市木崎小丸山遺跡の前期旧石器」『旧石器考古学』旧石器文化談話会, 85, pp.39-64。
- 上原遺跡調査会（編）1957 『上原 長野県埋蔵文化財發掘調査報告』2, 長野県教育委員会。

報告書抄録

ふりがな	きざきかきだいがくいせき							
書名	木崎夏期大学遺跡							
副書名								
編著者名	加藤大智・上峯篤史(編)、飯塚寿音、吉川主浩、青野舜、堀内祐花							
発行機関	南山大学上峯篤史研究室							
所在地	〒466-8673 愛知県名古屋市昭和区山里町18 南山大学人文学部人類文化学科							
電話番号	052-832-3111(上峯篤史研究室)							
発行年月日	2022年2月28日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (af)	調査目的
		市町村	遺跡地図 番号					
木崎夏期大学遺跡	ながのけんおおまちし 長野県大町市 たいらいちまち 平尾10901	20212	150	36°33'3"'	137°50'32"'	2019.12.14 ～ 2019.12.22	6.00	学術研究
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
木崎夏期大学遺跡	包藏地	縄文時代	—	縄文土器 黒曜岩製造物		—		
要約	木崎夏期大学遺跡は近年、後期旧石器時代をさかのぼる可能性がある遺跡として議論されている「木崎小丸山遺跡」を包摵する縄文時代遺跡である。従来の研究では、同地における黒ボク土層の有無および古地形が詳らかでなく、「旧石器資料」の評価に課題をもつていていた。この点の解消を目指して、2019年12月に小規模な発掘調査を実施した。調査の結果、これまで縄文時代の遺物包含層と考えられていた層準は現代の擾乱土層で、さらに下位で黒ボク土層が確認された。今回の発掘区付近は侵食谷が存在したと推定され、良好な黒ボク土層が残存していると考えられる。							

長野県大町市 木崎夏期大学遺跡

Kizaki-kakidaigaku Site, Omachi-city, Nagano Prefecture, Japan

発行日 令和4(2022)年2月28日

編集 加藤大智・上峯篤史

発行 南山大学上峯篤史研究室

〒466-8673

愛知県名古屋市昭和区山里町18

南山大学人文学部人類文化学科

TEL 052-832-3111(代表)

